国際コミュニケーション学部
教授　石川　達夫

　パンデミックで世界が大変なことになりましたね。それだけではありません。地球温暖化による災害の頻発、国境紛争、民族紛争などなど……。

　そんな難問だらけの現在の世界の中で、大きな影響力を持つ幾つかの大国――特にそのリーダーたち――の振る舞いを見ていて、皆さんはどう思うでしょうか？　大きくて強い国＝素晴らしくて理想的な国と思えるでしょうか？　もしもそう思えないなら、大国だけを見ていては駄目だということです。

　イギリスの哲学者カール・ポパーは、「マサリクのチェコスロヴァキアは、かつて存在した最高かつ最良の民主主義国家であった」と書いていますが、このマサリクとは、「人間性」と「民主主義」の理想を掲げてチェコスロヴァキア（現在のチェコの前身）の初代大統領を長く務め、この国を高度な民主主義国家・文化国家へと導いた哲学者です。哲学者が統治者となる時に国家は最も優れたものになるというプラトンの「哲人王」を具現したのがマサリクだったと言えるでしょう。

　チェコの作家チャペックの『マサリクとの対話』は、農村の貧しい家に生まれたマサリクが哲学者・政治家となるまでの波乱に満ちた生涯を描いた伝記文学の傑作であると同時に、チャペックとマサリクとの興味深い対話の記録でもあります。世界が大変な状況にある今だからこそ、「哲人王」の劇的な生涯の物語と含蓄に富んだ深い言葉を読んでみてはいかがでしょうか？

『マサリクとの対話―
哲人大統領の生涯と思想』
カレル・チャペック；
石川達夫訳
(1993,成文社)

【所蔵情報】

本館	資料ID	105558407
	請求記号	/289.3/C16
神田分館 Knowledge Base 展示中	資料ID	106111578
	請求記号	/289.3/C16/